

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

vol.54



西条市 チロルの森

特 交流と連携をめざすまちづくり 集

—国際交流とまちづくり—

- この世はすべてこれ舞台
- 世界88ヶ国田舎同盟を目指して
- グローバル・コミュニケーションのまちづくり
- 真の国際化を求めて
- スリランカってどんなとこ



アングル

地域の発展をめざして……………愛媛県農業協同組合中央会会長／寺井 信隆…………… 1

(特) 交流と連携をめざすまちづくり (集)

ー国際交流とまちづくりー

この世はすべてこれ舞台……………肱 川 町／ギャビン・バントック…………… 2
 グローバル・コミュニケーションのまちづくり……………小 田 町／高本師津雄…………… 4
 世界88ヶ国田舎同盟を目指して……………明 浜 町／片山 元治…………… 6
 真の国際化を求めて……………宇和島市／石川 淳…………… 8
 スリランカってどんなところ……………玉 川 町／河上 浩…………… 10

論談ーまちづくりー

「好きなことがやれる」「自分の存在感がある」「何らかの得になる」……………備元気になる遊びの会社／奥田 祐子…………… 12

キラリ光るまち

鬼の里の夢づくり発進!……………鳥取県溝口町／大下 修一…………… 14

リレーでちょっとトーク

誰もが生徒で、先生で……………広 田 村／宇都宮 積…………… 16

青年団で学んだ事……………八幡浜市／大和加代子…………… 17

地域を生きる

地域に密着! オンリーワンのまちづくり……………三 瓶 町／前田 剛志…………… 18

まちづくりグループ紹介

しまなみ交流連携倶楽部……………伯 方 町／福羅 健二…………… 20

風おこしのちかい

架橋に向けて……………関 前 村／井村雄三郎…………… 22

研究員レポート

はじめの一步……………伊 手 博志…………… 24

MY TOWN うおっちゃんぐ

歩キ目デス&足ラテス……………岡崎 直司…………… 26

Information

媛のくにフラッシュ 〈広見町・日吉村〉…………… 28

まちセンからのお知らせ…………… 29

特集「交流と連携をめざすまちづくり」

今号のテーマ

国際交流とまちづくり

近年、インターネットの普及などにより、個人レベルでも世界中の人たちと、手軽に、また昼夜を問わず、情報を交換したり共有できる時代になりました。また、海外へ気軽に旅行したり、逆にこちらに來たりする人も年々増加している状況です。

ところで、国際交流といえば、地方公共団体による姉妹都市縁組などが、まず頭に浮かんできます。それも今日では、欧米先進諸国から次第にアジア地域などへ、また行政主導から民間主導の草の根交流へと変りつつあります。

交流し、異文化に触れることで、また違った発想や新しい視点が生まれ、それをうまく地域づくりに活かしていく。あるいは、お互いに足りない部分を補完しあうことによって、協力関係を築いていく。そうしたことがこれからの地球時代には、必要なことではないでしょうか。

そこで今号は、「国際交流とまちづくり」というテーマで特集をくんでみました。

(編集子 稲田)

表紙の言葉

石鎚山を囲む山壁の中に、シックで深みのある欧風建物が目に入る。チロルの森です。うっそうとした杉木立に抜ける遠くの明るさが、深い森に入った気持ちにさせてくれます。「赤ずきんちゃん」に出てくるような森。チロルの森には満々と流れる川の音が森に跳ね返っていた。空間を楽しむ森でした。

柳原 あや子





農業協同組合法が施行されて、今年は五十年目にあたります。

農業協同組合（以下JA）は、この法律に基づいて設立されておりますが、法施行直後の昭和二十三年には県内に三百三十四の総合JA（貯金の受入等と他の事業を兼営する）が存在しておりました。現在では三十五ですから、数のおうえでは五十年間におよそ十

分の一に減少しました。原因は九十九%合併ですが、これはJAの力量を強化して農家組合員や地域住民の負託に応えるためで、十年度末までに十JAにする構想を進めていくところ です。

JAの目的は、直接的には事業を通して農家組合員の経済力を高め、生活を豊かにすることにありますが、あわせて、地域社会の発展に貢献することも目的にしております。

日本は戦後、日米安全保障条約のもと、経済復興に専念してきた結果、世界に類例のない急速な復興と高度経済成長を遂げてきました。しかし、その裏側では公害問題が多発したり、首都圏や大都市への人口移動・集中が行われ、農山村等、俗に言う「いなか」は過疎と高齢化が進んだことも事実であります。

国土の均衡ある発展とか、地方の時代とか云われ始めた

のもこのような現象が明らかになってきた頃からですが、今のところは謳い文句に終わっていると思います。

このことは、国・政府の責任ばかり問うわけにもまいりません。私達地方に住む者が、自らの課題として地域の発展のために何をなすべきかを考え、行動することが肝要であることは勿論であります。

地域社会の一員である私どもJAは地域社会から価値ある存在として認められ、地域社会の発展にいささかなりとも貢献できることを念頭に、JA組織と事業の改革に取り組んでいるところであります。

いま、世界の人口は、一年間に九千万人程度増加していると統計数字は示しておりますが、食糧供給の方は、単位面積当たり生産力の限界と耕地の砂漠化によって人口増加に対応できず、二十一世紀は食糧をどうするかという問題

が最大の課題になるとワールド・ウォッチ研究所のレスター・ブラウン所長は警笛を鳴らしています。このことから「国土の均衡ある発展」を実現し、国民食糧の安定供給のための食糧基地をキチンと確保しておくことが大きな課題となっております。

そこでいま、新たな農業基本法を制定すべく、食糧・農業・農村の将来方向について、各界の意見を求め、国を挙げて検討しておりますが、国民各位の充分なご理解とご協力が必要であることは言うまでもありません。

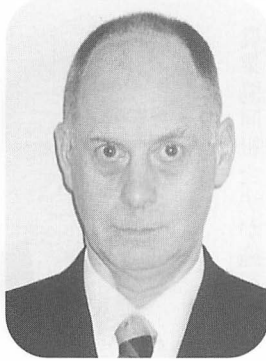
ともあれ、これからもJAは、地域の発展につながる事業展開と地域にひらかれた組織として文化や福祉の面にも貢献できるよう努力したいと考えているところであります。

『この世はすべてこれ舞台』

—英語劇で国際化—

肱川町社会教育指導員

ギャビン・バントック



ームダンスなどがおこなわれ、会場いっぱいにつめかけた大勢のお客さんの前で熱演をくりひろげました。

この催しの母体となる中学生の英語劇は、実は十六年前の小敷エサマースクールにさかのぼります。

当時私は、千葉県柏市にある麗沢大学に勤めていましたが、休暇の度に肱川町に来て小敷温泉の近くに滞在していました。ある年、地元のご父兄からの要望に応じて小・中学生を対象にサマースクールを開きました。期間は一週間で、午前中だけ、会場は小敷集会所でした。この活動が町の教育委員会の知るところとなり、第二回目からは、教育委員会後援となり以後は毎年続いてきました。内容は宿題の他に、英語の歌、ゲーム、時には英語の寸劇やスピーチ、一泊のキャンプなど毎年何か新しい活動が加わりました。第六回から、対象は中・高校生となり、第八回〜十回迄は、

「肱川町歴史民俗資料館の展示品の説明を英語に翻訳する活動をしました。」



肱川中学生による「リア王」

の公演には肱川町の人々や、肱中生が全校をあげて見にきてくれました。

そして、その夏には、「マクベス」に出演した大学生達がサマースクールに手伝いに来てくれ、英語劇ムードが一挙に盛り上がり

ました。申し遅れましたがサマースクールの第一回から毎年何人かの麗大生が講師として手伝ってくれていました。と云うのは、お恥ずかしいことですが私は日本語ができませんので、どうしても通訳者や助手を必要としたからです。

その後一九九三年、第十一回サマースクールから英語劇に専念するようになりました。そのキッカケとなったのは、同年三月内子座で行われた英語劇「マクベス」です。この劇を演じた麗沢大学英語劇グループこそ、私が在職中、心血を注いで育て、演出してきたグループだったので。こ

肱川町では四年前から、「肱川国際風フェスティバル」を開催しています。出し物は、肱川中学生による英語劇、外国人による民族芸能などです。今年も去る八月二十四日に風の博物館で英語劇「リア王」、ハワイのフラダンス、中国の太極拳、フィリピンのボール

その年から町の教育委員会と公民館主催で「肱川国際風フェスティバル」を開催するようになりました。第三回は、風の博物館にちなんで「風」をテーマにした英語劇を私が書き下ろしました。内容は風神、雷神が登場したり、天狗や雨乞い踊りもとり入れるなど地元に着したものでした。

この時から中学生達は、風博の隣りにある町の宿泊施設に泊まりこんで三日間英語漬けの生活をするようになりました。日本語で舞台に立つのさえ大変なことなのに、たった三日間で演技や入退場のすべてを完全にマスターしなければなりません。最初恥ずかしさや戸惑いがあっても公演という集団の大きな目標に向かって中でそれを乗り越えていきます。最後のカーテンコールを見ながら、私は若者達の素晴らしい適応力と目覚ましい成長振りに毎回胸を熱くしています。

ともあれ英語劇だけで一般

のお客さんをお呼びするのは難しいので、県の国際交流センターを通して毎回愛媛大学の留学生などで民族芸能に堪能な方を紹介していただき出演していただいています。



肱川英語教室「真夏の夜の夢」

実は肱川町には、もう一つ英語劇活動をしている団体があります。公民館が主催する英語教室のメンバー達です。私はこちらでも演出を担当し、妻が通訳兼助手として協力してくれています。

「なぜ英語劇をするのか」

を一言で云うと、日本で長年英語教育にたずさわってきた経験から導き出された私の信念であり結論であります。第一の理由は、公演日という明確な共通目標がある、第二に、

怒ったり泣いたりを英語で感情表現する、第三に演技をしながらスラスラ台詞を云うためには、英語を完全に暗記せざるを得ないなどの点があげられます。一方テキストを使つての英会話では、到達すべき目標の必然性、逼迫感にかけ、従つて本人のやる気を引き出す動機づけが弱くなりがちです。

肱川英語教室での第一回目は「古事記」と肱川の伝説を組み合わせた「高天ヶ原から肱川へ」、第二回目はシェイクスピアの「真夏の夜の夢」そして今年の演目は「桃太郎」に決定し、十一月の公演をめざし練習に取り組んでいます。うれしいことに小学四年生の

参加もあつて、祖父、息子、孫という一家三世代の共演が実現しそうです。

話が再びサマースクールに戻りますが、今年「リア王」を取り上げたのは、嵐のシーンがあつたからです。しかし中学生だけではとても無理なので、大学生と、地元の高校生にも協力を呼びかけ大・高・中の三者の共演が今回初めて実現しました。その中の高校生の一人が「中学時代のサマースクールで習った単語がでてきて、最近英語がおもしろくなつてきた」と云つてくれました。公民館と地元の皆さんに支えられた私共のささやかな歩みが国際社会に生きてゆくこれからの若者達に少しでも役立つならこんな嬉しいことはありません。

(邦訳 京子・バントック)

(注) タイトルはシェイクスピア作「お気に召すまま」からの引用です。

『グローバル・コミュニティの まちづくり』

ODAの木協会

会長 高本 師津雄

「ODAが小田となんの関係があると言うんぞ」
「わけの判らん事言いよらずに
ちいと家の手伝いでもせいや」
以前は、よく聞かれた話です。

私たちの住んでいる小田町は、森林率約九〇%という周囲を山に囲まれた人口四千人余りののどかな町です。こんな町に、平成五年「ODAの木プロジェクト」が発足しました。このプロジェクトは、当町のローマ字表記「ODDA」と政府開発援助の「ODA」



をかけて、町の主幹産業である林業「木」をベースに、自治体レベルの公的な開発援助、国際貢献と解釈して、グローバルな視点に立つて考え行動する教育や文化地域づくりを目的として幅広い活動を行っています。発足当初は五ヶ年事業ということで、自治体を中心に町民有志のボランティア



で行ってききましたが、今年が最終年度となるため平成九年五月に民間団体「ODAの木協会」を設立しました。

この協会では、国際化事業部、環境教育事業部、ブランド事業部の三つの事業部に分かれており、それぞれの事業部で活動しておりますが、今回は、国際化事業部で行っている主な事業について簡単にご説明いたします。

【中学生みどりの国際 協力タイ国派遣事業】

派遣先…タイ国

(バンコク・コンケン)

派遣期間…十日前後

(夏休みを利用)

派遣者…中学生五名(小田中生)

プログラム…青少年交流・植林・

ホームステイ・タイ国体験等

【ODAの木交流】

開催日…毎年七月下旬(二泊三日)

参加者…県内在住留学生

(愛媛大学・松山大学) 10名程度

プログラム…ホームステイ交流・

小田町燈籠まつり見学等

タイ国は、森林の急速な減少により、干ばつや塩害、そして雨季ともなれば洪水や土砂崩れなどの災害を受けています。こういった現状を知ることにより、いかに緑が大切であるか、いかに自分たちが恵まれた環境にいるかを認識し、国際協力事業団(JICA)が行っているタイ東北部造林普及計画の植林作業を手伝うことにより、林業への関心とグローバルな心を育むことを目的としています。また、現地研修では何事も自分たちで考え行動するよう指導しており、今後社会にでたときに幾多の困難にあっても、自ら考え、解決に向けて積極的、意欲的に行動するそんな人間に成長してほしいと思います。

この事業は、海外の様々な人たちと出会い、ふれあい、交流を深めることにより国際社会に向けた異文化理解を促進すると共に、誰もが広い視野と豊かな感性を育むことを目的に開催しています。

「アジアのあの国の人はどんな生活をしているのだろうか?」「どんな食べ物があるのだろうか?」「どんな言葉を喋るのだろうか?」...

こんなことから国際交流が始まります。お互いの国を知り、お互いの文化を肌で感じ合うことは、地球に生きる私たちにとって重要なことであり、今後の国際化社会に向けて、必要不可欠なことではないでしょうか。

この他に、「ODAの木協会」の活動を町民に理解していただくための「国際理解講座」や海外からの林業研修生を受け入れる「林業研修員受入事業」等も行っております。

国際交流において、地方での取り組みはとて抵抗があり

ました。しかし、自治体と外務省関連の援助を受けながら、町民有志のボランティアでここまでやってこれたことは素晴らしいことだと思います。異文化に触れ、体験することを通して価値観の多様性に気付くことから、改めて自分を、そして家族を、ひいては地球全体をも見直せるはずです。助け合い、分かち合い、共に生きるということの大切さを

より多く



の人たち

と学び合いたいものです。

地方から発信できる国際交



インド事業部があり、今後活動していく上で必要不可欠な事業部です。

今まで四年間ODAの木プロジェクト事業を行ってきましたが、まだまだ町民の理解や関心が薄く「ODAの木は何?」「どういう活動をしているの?」という声をよく耳にします。マスコミ等にも取り上げられ町外からの関心はあるのですが、地元の評価が今一つとなっています。今後活動していくためには、町民一体となつて取り組むことが必要となつてきます。町民への理解と協力の呼び掛けをこれからの重点課題として頑張っていきたいと思っています。

流・協力の具体的に可能な事業を実施することにより、直接的、また間接的にグローバルな視野に立て、地球規模の問題においても、「なぜ」「どうして」の部分に答えが見えてくると思います。

私たち「ODAの木協会」の最大のテーマは、「地球の幸せ」であります。それらを追求する手段として環境教育にも力を入れており、環境教育スクール「森の学校」を昨年度より小田深山で開校し好評を得ています。また、これらの事業を推進するためのマネージメント部門として、ブラ



『世界88か国田舎同盟を 目指して』

農事組合法人 無茶々園

事務局長 片山 元治

中国・韓国・タイ・ミャンマー・ネパール・インド・バングラ・フィリピン・アメリカ・ブラジル・カナダ・ペルー・イギリス・イタリア・スペイン・フランス・ドイツ・ノルウェイ・ジブチ・セネガル・ガーナ他にもまだかなりの国があったと思います。我が無茶々の里を訪れた外国人は百人以上ではないと思います。生まれて初めて手の届く近所で、マジマジと見入った私のおっかさんは、こんな毛唐を

交流と連携をめざすまちづくり

連れてきおつてと、最初こそおどおどしていたが、今じゃ、お前のへたくそなイングリッシュよりワシのボディラングエージの方がしつかりわかつちよるわいといつて、結構楽しく付き合っています。

「戸締まり用心火の用心・人類皆兄弟」という、どこかのテレビのコマーシャルがありました。が、どうも、都市の人は、「人類皆兄弟」と言いながら、「戸締まりの用心」をするようです。その点、やっぱり、田舎人同志の付き合いはいい。戸締まりなど必要がない。裸の心を開いてアルコールを入れれば、「人類皆兄弟」実に、楽しいものです。

我が明浜町には、明浜町青年海外派遣協会なる組織があり、すでに数十名の研修生を海外に派遣しています。私も六年前に小学校六年生の息子と二

国際交流とまちづくり

人で四十日間の太平洋一周の清貧旅行に行かせてもらいました。戒厳令下のタイ国をはじめ、命懸けの親子の旅は、当世流行の親子の断絶を解消し、美しい

親子の愛を育みました。その時身に染みて感じたことは、日本と南の国とは、お金の価値と、労賃の違いがひど過ぎるほど違っていることでした。十分の

から三十分の一といっ

たところ

す。そし

てどこの

国にも共通

していたこ

とは田舎の

過疎化です。

人々は、お金

を求めて故郷

を捨て流浪の民

となって都市へ

流れるのです。日本も含め、世界中が、国家経済の発展過程で起る共通問題だと思われ

ます。私達無茶々園は、町作りの運動体と自負致しております。

ただ、イベントや、人の集まる施設を作り、お金を落させる町作りは、ちよつと虚しすぎ

ると思います。少しの

お金と引き替えに

たくさんのお金と汚された自然、そして、お金に惑わされる心だけが残ります。私達の町作りは故郷の再生です。こ

こに生まれ育ちそして大地に

帰る。この生き方に胸を張れ

る心の充実した集落作りです。

つまり、資本主義経済に巻き

込まれてしまうのではなく一

定の距離を保って、非営利、

共同の地域社会資本の充実に

よる地域社会作りです。当面



の課題は、農業の集落企業化と仕事の創造、高齢者の集落介護等の問題です。

今まで多くの外国人が無茶々園を訪れ交流を深めました。町内の多くの若者があちこちのお国で迷惑をバラ播いてきました。もうそろそろ、野次馬的交流を卒業して、一定の目的を持った交流をしようと思うようになりまし

た。それが都市を介せず、世界中の田舎が有機農業を中心にお互い助け合いながら自然を大切に、自分たちのムラを守っていこうという「世界八十八カ国田舎同盟」です。今から百年かけて八十八カ国の特定の田舎と交流を深め同盟を結んでいきたいと考えています。

その第一号としてフィジーのサナサナ部落とコリカタ部



落を交流相手に選び、取り敢えず二人の若者を招待することにした。彼らの村は、電気もガスもなく食物は作るというより出来るといった方がいい、砂糖キビが換金作物で酒を飲む習慣のない村です。ところが、文明文化

の情報は世界の津々浦々迄行き届いているらしく、文明の利器に対する願望は非常に強く、この辺から集落社会の崩壊が何となく見えてきます。まさに日本の田舎が辿ってきた道を今、歩もうとしています。原始

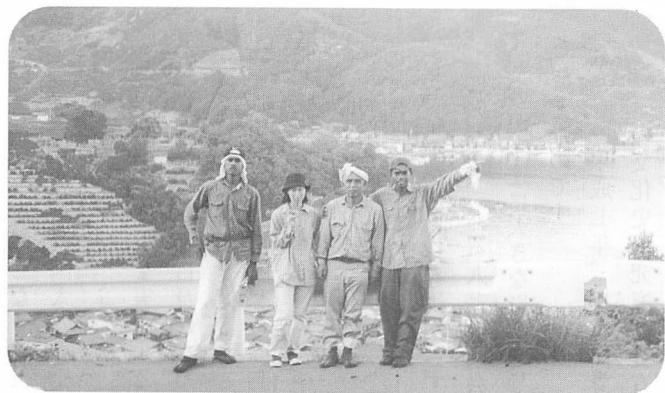
集落協同体をなんとか無茶々園の目指すような地域社会協同組合に軟着陸できないか、そのお手伝いが出来ればいいのになあと思っています。彼らが来てもう一ヶ月が過



ぎました。食物や習慣が違っても若者の順応性には驚くものがあります。我が家の蜜柑山で農作業を皆でやりながら、日本語を教え、農業の夢を語り、生活のことを話し、ワイワイガヤガヤやっていると一日がゆつたり過ぎ、充実した日が過ごせます。その中で、冠婚葬祭等の行事に触れ、地域で胸を張って生きている姿を彼らが理解できれば初期の目的は達成できると思うのです。そして、互いの交流が進めば物流が起き、商流となっていくと思うのです。農業、地域社会を中心とした商流が起れば持続的地域社会の確立が進むものと確信しております。

しかしながら、一つだけ問題があります。滞在許可証の問題です。不法滞在者が後を

絶たない現在、滞在許可証が難しい問題であることは理解できます。しかし、農業、田舎の生活は四季を通じて一年がサイクルです。三カ月では少なすぎます。せめて一年間の滞在許可がほしいです。

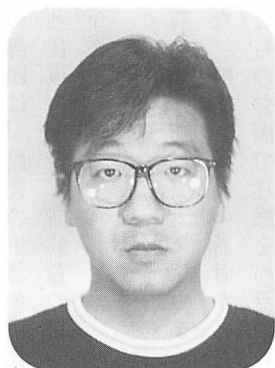


『真の国際化を求めて』

21イロハ塾

塾長

石川 淳



21イロハ塾は、平成三年に愛媛県の指導により誕生し、翌年、宇和島市に引き継がれ宇和島市生活文化若者塾（通称・21イロハ塾）となり現在に至ります。

現在二十一名の真の若者から自称若者達が、開塾当初より進めているテーマの一つに、

国際化があります。

こんな田舎に住んでいる者でさえ、気軽に海外旅行に出かけられるようになり、国際化と言う言葉が珍しくなってきました。しかし、現実はどうでしょうか？実際に外国に行つて観光をする。これはこれで貴重な経験で、決して否定するものではありません。しかし、その国の人と出会い、話をし、その国の伝統・文化を学ぶ。そんな人は、決して多いとは言えないでしょう。

そんな意味においての国際化を目指して、私達の活動が始まりました。

平成四年、新居浜市の若者塾が国際交流パーティーを行い実績をあげているとの情報を得、早速、新居浜市に出向き意見交換を行い大変刺激を受け、平成五年、宇和島市で初めての国際交流パーティーを行いました。多くの市民が異国の人と交流を深め—是

非、又やってください」とのお言葉もいただき、大成功に終わったのですが、我々塾生にとっては大きな問題が残ったのです。



当塾は開塾

当初より自己研鑽の場と認識し、決してイベント屋では無いとの方針で進めて来ました。実際にパーティーを行い、その為のノウハウは得たものの、私達塾生はパーティーの進行

中はスタッフに徹しなくてはならず、肝心の外国人との交流が出来なかったのです。

翌年、第二回目を実施する中で議論し、塾生自身もつと交流できる方法を模索するという事で、パーティーは凍結となりました。

一度は火をつけてみたものの、国際化は言うよりも難しく、なかなか方針も決まらずにいた時、ある人との出会いが私達に大きな影響を与えたのです。

宇和島屋前にて

平成七年、郷土出身の文化史研究家、谷有二氏によりアメリカ・ワシントン州シアトル市最大のマーケット「宇和島屋」の存在を知り、この宇和島にゆかりのある宇和島屋に興味を持ちました。

その後、アメリカ・モンタナ州に留学中の谷氏の御息が、一時帰国された際に来宇いただき、「宇和島屋ストーリー」と題し、シアトル、宇和島屋について熱く語っていた

できました。

その講演の終わる頃には、塾生達の好奇心はどんどん大きくなり、塾長の「とにかく行こう！」の一言で、みんなその気になってしまったのです。

でも、ただ行くだけでは勿体ない。「宇和島フェアをしよう」「宇和島の紹介ビデオを作って、シアトルの人たちに見てもらおう」宇和島屋で蒲鉾、じゃこてんが販売されていることを知ると、すぐに取り寄せ試食。あまりの不味さにビックリし、「是非本物を食べて貰おう」「販売しよう」など多くの意見が出され準備が始まりました。

準備を進めていくうちに、アメリカに食品を持ち込むことの難しさと、自分たちの安易さを痛感し販売を断念。しかし、何とか試食だけは行いました。

蒲鉾・じゃこてんはFish Cakeと訳され評判も上々のようでした。

又、シアトルではシアトル市長を訪問し、宇和島市長よりの親書を手渡しシアトル市と宇和島市の交流の第一歩を見届けました。この他、宇和



シアトル敬老院慰問

不足等により色々な失敗を経験したものの、必ず次の機会へ生かせると確信しています。今私達は、「宇和島屋」から再来年社屋が新築オープンするに当たり「宇和島フェア」あるいは「愛媛県フェア」

の開催を要熟されています。実際、宮城県などは数年前から「宇和島屋」にて物産展を開催しているそうで、本年度はそのノウハウを吸収するため、宮城研修の実施を考えています。

実際に「宇和島フェア」を行うとなると、多くの人手と資金が必要となり、私達だけの力で実施することは不可能に近く、やはり行政・企業の積極的な参加が必要となります。しかし、今の私達には行政や企業を巻き込むだけの力も実績も無いのが現状です。

これから私達は、シアトル、宇和島屋との交流を閉ざさないよう自分たちで出来ること

を見つけ出し、続けて行くつもりです。

その中で国際交流と町づくりを結び付け、この交流が塾生から市民へ、そして行政・企業へと広がっていくことを目指しています。

そして「エメラルドシティ・シアトル」と「パールシティ・宇和島」の良い関係が生まれることを期待しています。



『スリランカってどんなところ』

日本スリランカ友好協会

副会長

河上 浩

皆さん「スリランカ」という国が地球上のどのあたりにあるかご存じですか？

そうインド大陸のベンガル湾につき出たその先にボンとひかえめにある卵形の小さな島。まさにインド大陸のしずくのような島がスリランカ。

面積は九州と四国を合わせた程。人口は、約千八百万人、主な産物は「セイロンティ」と総称される紅茶、輝くルビー、キャッツアイ等の宝石類。ジューシーでトロピカルな果物が一年中実り、国中がヤシの木におおわれ、しかも長い

英国統治によるファンタスティックな建造物がいたる所で見かけられる、これこそ地上の楽園？。いやいや中々、そんなのんびりとした、天国のような国でも、異民族（シンハリン人とタミール人）間の熾烈な戦いが続き、多くの国民が内戦の犠牲になっているのが実情。

これ程、イメージと現実の落差の激しい国も少ないのでは？



旧知の前愛媛大岡本幸治教授より、「スリランカ人の青年貿易商デスモント・ジャヤラット氏が、日本の縫製業とタイアップしたいとのこと、ついでには君も縫製業の端くれ、どこか良いところを紹介してあげてほしい」との依頼があり、早速会おうということ、で、教授の研究室へ。そこには、鼻ひげを蓄えた、小柄なスリランカ人が教授と雑談中。挨拶もそこそこに流暢な日本語

で「スリランカには、スリおらんですから一度来てみて下さい」と言う。そのジョークが気に入り一九九一年七月福岡空港からスリランカ・コロンボ空港へ。むせ返るような暑さと、脳にまで突きささるような匂い。税関吏の無表情で横柄な態度に「この国は何なんだ」が第一印象。しかしデスモント氏の巧みなリードで、いたる所の観光、会社訪問。見る物、聞く物すべて新鮮、食べる物は強烈に新鮮。まずは七〇%超の好感を得て、帰国。

その後、時を経ずして何度か訪問する中で、デスモント氏より「マタレー市の市長が、消防車を送って欲しいと言っている」とのんでもないメッセージ。帰国後、時の玉川町長渡部修氏に、事の子細を説明。すると、町長「たまたま来春、消防車二台が入れ替える物だが、向こうさえなければ送ろうか」とおっしゃる。

こうして一九九二年二月、日本初の中古消防車贈呈が実現。その消防車がスリランカの首都キャンデー市での火災に出動し、その威力を発揮したとの連絡。「日本では廃棄処分になる物が、そこまで活躍して喜んでもらえるのなら、・・・」と 翌九二年、救急車一台、消防車一台を追加贈呈。

ちなみに、アルビハレ市長がかかげた選挙公約の一つは「私の在任期間中に、消防車を必ず買います」だったとか。選挙公約を一気に、しかも大巾にクリアしたアルビハレ市長は、玉川町の皆さんにお礼が言いたいと一九九四年二月、来日。その機を得て「玉川町、マタレー市友好宣言」が両町市長の手によって結ばれた。同年七月には、玉川町及び今治市周辺有志の拠出金をもとに、かねてから建設中であった保健所、職業訓練、幼稚園、及び宿泊施設を備えた、マタレー市コミュニティセン

ターの落成式に村上忠美新町長名代の井出助役を代表とする有志十二名が出席した。

交流を継続し発展させるためには、行政に余分な負担をかけることなく「民間レベルでの柔軟な対応も必要なのは」と、玉川町以外の有志にも働きかけ、「日本スリカンカ友好協会」を九四年六月発足。

その後、顧問兼通訳として岐阜大学工学部のアジャント・フラット博士を迎え、更に、外務省賛認団体「日本スリランカ協会」にも理事団体として加盟。又、スリランカ側でも「マタレー日本友好協会」という受け皿団体が発足し、両市町及び両協会の交流という重層で、しかもきめ細やかな関係が維持できる体制となりました。

昨年九月には、「マタレー協会」より、「スリランカでは、電力供給が充分でなく停電が頻繁に起こる。最近でも病院の手術中、停電で、患者が死亡した。何とかならないか」

との依頼を受け、大型自家発電装置二台を現地に寄贈。

更に、バイク、自転車、中古ミシン、バスなども送っており、一通りのハードはそろったのではと、理解しております。



毎月、定例理事会を開き、反省やら意見交換等をしておりますが、近頃は「物を送るだけではダメだ。もっとソフト面での交流をすべきだ」との意見が、もっとも熱心に活

動する会員から出てきています。

当初からの事業課題には「両国の小・中学生による、作文、絵画の交換、及びホームステイ交流」をも提げてあり、作文、絵画交流はすでに何度か行い、町内小学生達にも、好評を得ていますが、しかし、治安状況の悪い国に子供を送る事は躊躇されるし、又、「奨学金制度、里親制度の確立」も現地での十分な調査等ができず、まだまだ実現にまでは至っておりません。

かつてサンフランシスコ講和会議の席上イギリス植民地より独立したてのセイロン国蔵相、ジャヤワルデナ氏（後、スリランカ大統領）が、「前大戦中にもたらされた損害に対し、我々は、日本に賠償を請求する権利を有する。しかし、わが国は賠償を請求するつもりはない。何故なら『憎しみは、憎しみによって止まず、愛によってのみ止む』との、仏佗の偉大な言葉を信ずるか

らである。我々は、日本に友情の手を差しのべる。日本国民とセイロン国民が、平和と繁栄を享受するため、手を携えて前進する事を信ずる」と発言、世界に「愛と寛容」という至言の感動を与えた事は、忘れる事はできません。

時を経た今日、日本は経済大国となり、我が世の春を謳歌していますが、ジャヤワルデナ氏を生んだスリランカは、なお戦後日本と変わらない水準での生活を、余儀なくされております。

私達協会は、些やかでもとの、気持ちを大切に、無理をせず、コツコツと、スリランカへの想いを育んでいきたいものだと思っております。



「好きなことがやれる」
「自分の存在感がある」
「何らかの得になる」

(有)元気になる遊びの会社

奥 田 祐 子

いわゆるレクリエーション援助を行う会社であり、後者は人間賛歌、応援歌をテーマにオリジナルソングをひっさげて、各地でコンサート活動を行っているグループです。

対象者は0歳～百一歳へ

(現在の対象者の上限が百一歳という

意味です)で、

県内外の地域・学

校・福祉・企業とかな

り幅広いものがあります。

十数年に渡るその関わりの中

でまちの元気さについて私

なりに述べていきたいと思

います。

一、お年寄りが住みつづけられる

まちは元気

リハビリテーションと生きがいづくりを目的として、多くのお年寄りに遊びの援助を行ってきました。その形態は二つ。施設と在宅です。お年寄りと関わる中で、全域の人

が、住み慣れたまちで暮らしつづけたいと願っていました。

二週間に

一度、

地域の集

会所に集ま

り、健康チェック

やおしゃべりをしたり、

食事をする会に出かけていま

すが、当初は援助者という意

識が強かったのが、年数を重

ねる中で、変化してきたのを

感じます。私のために自作の

野菜や米、漬物をいつも持つ

てきて下さるのです。ある時、

私がネパールの友人からもらった豆をゲーム用に使ったところ、豆を植えて育てたお年寄りがいました。そうして実った豆をわざわざ持ってきて「奥田豆」と名付けたと笑って話してくれました。

そういえば、私の友人が主宰する障害を持つ仲間たちの作業所が毎年行うハイキング大会へは五百人以上の参加者があり、その人たちの昼食は、全て地域のお年寄りが班分けして用意するといっていました。それも喜んでやってくれるというのです。

二、やりたいことがやれるまちは元気

私たちは無名のグループです。私たちがのコンサートを開くとすると一番困るのは人集めです。ポスターやチラシだけでは人は来てくれません。主催する人たちのやる気、心意気が問われるのです。

そんな中に、「過疎」と呼

私は現在、仕事では(有)元気になる遊びの会社、余暇活動ではヒューマンソンググループ「ザ・わたしたち」という二つのライフワークを持っています。

前者は、遊びを活用し、人生(生活)を活性化させる、

ばれるまちに嫁
ぎ、二人の子

育てをしな

がら育児サ

ークルを

つくり、

私たちを

呼んで下

さったお母

さんがいま

した。当日会

場に出向いてみる

と、ビックリ、町長、

教育長まで会場に顔を出

していました。後で聞いたの

ですが、町長の所へ直接足を

運んで頼んだんだそうです。

今年、成人式で歌わせてい

ただいたまちも、女性の職員

の人の「これしかない」とい

う誠意で私たちの成人式コン

サートが実現しました。

三、まちづくりのキーワード

こんな出会いから、又、自
分の人生をふり返ってみても

「好きなことがやれる」「自分
の存在感がある」「何らかの得



になる」この三つは生き生き
した人生を創る上のキーワー
ドだと思えてなりません。

まちに住む人々が、中でも

弱い立場にいる人々が、「好き

なことができるまち」「自分の

存在感が感じられるまち」そ

して何らかの「得」を得るこ

とができるまち」そんな視点

のまちづくりをしているまち

はきつと魅力あふれるまちな

のだと私は確信します。



キラリ光るまち

鬼の里の夢づくり発進!

鳥取県溝口町役場 大下 修一



間足らずで行けるようになりました。ＪＲ伯備線、国道一八一号、米子自動車道が町の中心を並行して走り、交通アクセスは他の過疎地山間地に比べれば格段に良い条件といえます。

『あの鬼伝説が日本最古!?』

溝口町は鳥取県の西部に位置し、国立公園大山の西麓に広がる面積一〇〇㎢に五千六百人が暮らす、農業中心の小さな町です。高度経済成長とともに過疎化が進み、折りからの少子化と併せて、高齢化率は二七％と県平均を上回っています。

平成四年、米子自動車道が開通し、溝口インターチェンジを利用すれば大阪まで三時

平成三年春、町の中心を流れる日野川に架かる橋の架替え工事が完成し、この橋の名称「鬼守橋」にちなんで町では橋の四方の親柱に十匹の鬼の像を設置しました。

この親柱の群鬼が発端となつて昔から語り継がれていた「鬼住山の鬼伝説」に興味、関心のある有志が集まって「鬼

を語る会」が結成され、この鬼伝説を広く町民に知ってもらうということになりました。これを聞いた町では伝説はもとより関係資料も掲載した冊子の作成を依頼することになり、Ａ５版オールカラーの百二十ページに仕上がった、「鬼住山ものがたり」は、全戸配布することになりました。

この冊子発行に併せて町では鬼のシンボルマークを募集したところ、全国から三百通を超える応募があり、大きな反響を呼びました。

これらの活動の中から、伝説に登場する孝霊天皇を祀る楽楽福神社の古文書を発見し、この伝説の鬼は大牛蟹おおうしがにといい、天皇軍との戦いに敗れたのちは改心して町の守護鬼として繁栄に尽くしたことなどがわかり、歴史的には日本で最も古い時代の鬼伝説であることが証明されました。

『鬼の里の夢づくり』

今まで何げなく語られてい

た伝説が、日本で最も古い鬼伝説ということで、町では「日本最古の鬼伝説」をキャッチフレーズにして次々と施設を建設していきました。

ＪＲ伯備溝口駅前の公衆トイレ改修にあたり、鬼住山の麓でもありユニークなトイレにしようということで、鬼の顔をモチーフにした公衆トイレを設置しました。更に、公衆電話ボックスも鬼の顔をデザインしたものを四基とトイレを一基設置し、名実ともに鬼の里を内外にアピールすることになりました。

国や県の助成制度も最大限活用して取り組んだ大型プロジェクト「鬼の里夢づくり事業」では、四〇〇席の多目的文化ホール「鬼の館」、全高一八メートルの「ブロンズ製日本一の鬼の像」、鬼の資料を展示した三階建の「鬼ミュージアム」、全長二二〇メートルの「ローラーすべり台」や遊園列車等を備えた「おにつ子ランド」、町内全域をカバーする町



鬼ミュージアム

土芸能の発表を通して全国ネットの交流を深めようとするものです。

これといった郷土芸能のない本町でしたが、昨年末に青年を中心にした創作太鼓のグループが誕生しました。全国鬼サミットでの上演を目指して、女性六人を含む二十人のメンバーは鬼面太鼓と名付けて週二回鬼の館での練習に汗を流し、新しい郷土芸能に挑戦中です。

営ケーブルテレビ局「鬼の里テレビ溝口」などが、平成九年春にはすべて完成しました。これらの施設には町内はもとより、県内、県外からのお客様も多く、連休には町の人口以上の人が私達の町を訪れ、町民との新しい交流が始まりつつあります。

「鬼に魂を」

高速道路路網の整備により、四国、近畿圏域からも日帰り可能なルートになりましたが、今秋には、全国で鬼による町おこしをしている七十市町村に呼びかけて、全国鬼サミットの開催を計画しています。鬼にまつわる情報交換や、郷

楽」の上演など、全国鬼サミット開催へ向けた町民の取り組みは次第にその裾野を広げつつあります。

(鬼サミット九月六日開催)

「ふるさとに誇りをもて生きる」

鬼というマイナーなイメージを払拭し、この町の繁栄に尽くしたという明るいイメージを全面に出し日本最古という大きな付加価値もついた溝口町の鬼ですが、ハードは行政、ソフトは町民でという役割分担を明確にしたことで、素直な町づくりが出来つつあるのではないかと思います。

産業振興も地域振興も所詮、人づくりに尽きるのですが、ふるさとに誇りを持つて生きるという攻めのライフスタイルの中からこそ、新たな発想や挑戦が生まれて来たのではないかと思います。鬼という

暗く恐れられて、人の目につかなかつたものに光りを当て、伝説という目に見えないものを具現化する町づくりの成果

は三年や五年では現れないと思いますが、従来の行政依存型から、町民自発型の町づくりを目指して取り組んだ、鬼をテーマにした小さな町の大きな挑戦は、今、自ら実践できる町づくりの第一歩が動き出しました。

お年寄りは昔ながらの豆腐づくりに鬼の型を使って鬼っこ豆腐、陶芸クラブはシンボルマークを焼き付けた皿やカップの製作、手芸同好会は鬼のマークの草木染やパッチワークを、りんご農家は鬼っ子りんごの生産、JAでは地酒用の酒米の生産、鬼っ子弁当や、お菓子など、多方面で鬼が活躍しています。

鬼伝説という古くて新しい素材をもとに、町民の知恵と力が、新しいふるさとを造りつつあります。



私は広田村で
焼物の製作をしな
がら農村工芸体験
館での焼物づくり
の指導の手伝いを
しています。

工芸体験館では、地元で採
れる陶石を使った粘土を使い、
自然の中でゆったりとした気持
ちで自由に製作が出来るよう
に努力してきました。そして
みなさんの希望のものが出来
るようにいっしょに考え、製
作していくうちにあらためて
物をつくることの素晴らしさ

『誰もが生徒で、先生で!』

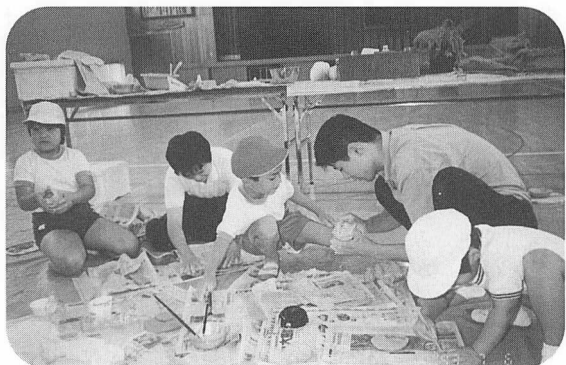


を体験者のみなさんから学
ぶ事が出来ました。

今までに三歳から九十歳代
までの幅広い年齢の方が焼物
づくりを体験し、さまざまな
感想を頂いています。

「三歳という年齢でちゃん
と使える皿が出来るとは思
いませんでした。お母さんにも
大変喜ばれました。また来年
も来ます」(保母)

「子供の食べ物の好き嫌い
があったのですが、自分で作
ってきたお皿に料理を盛りつ



けると残さずみんな食べてく
れました」(小学生母親)

「家族で参加して焼きあが
った物を夕食に使い、今まで
になく家族の会話や、コミュ
ニケーション作りに焼物が役
立ちました」(小学生父親)

「焼物教室の日は園生の気
持ちも安定し、いつもは口数
の少ない子供が目を輝かせ、
喜んで焼物の体験を話してく
れました」(福祉施設職員)

「リハビリ教室で作った作
品が、地元のふるさと産業祭
りで入賞してうれしく思いま
す。本人も毎年作って出品す
る喜びが出来たということど
す」(保健婦)

「手の力がなく粘土こねは出来
なく色付けがやっとでしたが
楽しませてもらいました」(リ
ハビリ教室参加者)

私の同業者の中には、焼物
教室の指導というと、素人相
手で面倒臭く、いやがる方も
多いのですが、私にとっては、
自分たちが思いつかないよう
な形、使い方など発想が新鮮

で影響を受けています。さら
に、みなさんがどんな食器、
器をほしがっているのか等、
流行を知るチャンスとなつて
います。

また県外から来られた方に、
「へー。こんな物つくっても
ダイジョーブなんだ。陶芸は
ブームで各地に教室があるけ
ど、磁器で手びねり、ロクロ
体験出来るのはめずらしいよ。

地元で土が出来るなんてうら
やましいよ」といわれ、改め
て地元の陶石(焼物の材料と
なり砥部焼にも使われる)の
質のよさと、粘土にするまで
の昔ながらの手法のすばらし
さを知りました。(使いやすく
焼き上がりのキズが少ない)

人にはさまざまな性格があ
るように、その数だけのいろ
んな焼物があつてよいはずで
す。町づくりでもそうだと思
います。

今後も町づくり人づくりの
ため焼物の技術を研いでいき
たいと思います。

『地元青年団で学んだ事』

八幡浜市

大和 加代子

皆さんこんにちは

私の住む八幡浜市は、新鮮な魚、日本一おいしいみかんが採れる所です。また飛行機の父「二宮忠八」の生まれ育った場所でもあります。

私は？、と言うと生まれも育ちも「やわたはま」という生粋の八幡浜っ子で、もちろん地元就職しております。社会人になると同時に青年団に入団し早くも九年目を迎えている今、この活動を通していろんな人と出会い、語り、

学ぶ事が出来ました。

一番最初のきっかけは、高三の時、市の青年祭に手伝いに行ったのが始まりでした。その時の印象はとても強烈なもので、集まっているみんなが、すごく生き生きしていてとても楽しそうで、また一生懸命取り組んでいる姿を見た時、とても感動しました。そんな好印象の中、青年団に入団し、地元青年団の先輩と活動を始めました。

しかし、周りは男の人達ばかりで心細さを感じていた頃、とても積極的な女の先輩に出会いました。その人は、私の気持ちを知ってか、行事で会う度に声をかけてくださり、



とても心強い味方になって頂きました。それから、その人のようになりたいたいと思うようになり、市連合青年団の役員になりました。今まで物事に對してあまり考えるという事をしなかった私は、周りの人達に影響されて、自分の考えを持てる様になったのです。そのうちいろんな研修会に参加する機会が多くなり、友人も増えてきました。

県団役員の仲間入りをした今、ここでは、本当の自分自身と向き合い、本当の私を知ることができました。

今まで「本音で語り合える仲間作り」を目標として活動して来ましたが、しかし、自分を振り返って見た時、自分自身、本音でぶつかっていただろうか。一人で悩んで無理をしていなかっただろうか。と心を開いていない自分自身に気付き、そんな自分を変える勇気を持つ事が出来ました。この時私は、本当の青年団の良さ、仲間の温かさを知った

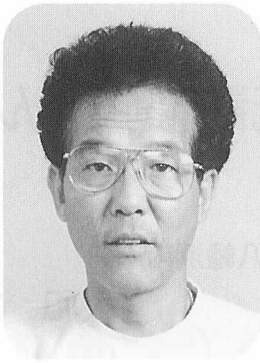
ような気がします。

本当の自分自身を見つめる事、他人に心を開くという事は、とても難しく、勇気のいる事だと思えます。しかし、上辺だけのつき合い程、もろく崩れやすいものはありません。今、生活している地域、つき合っている人達と今以上のいい関係になるためには、その一歩を踏み出す勇気が必要ではないかと思えます。

青年団に出会った頃のあの新鮮な気持ちをずっと忘れずに、本当の仲間作り、本音で語り合える仲間を一人でも多く増やし、少しでも住みやすい地域にしていきたいと考えています。



昭和五十九年八月十三日、
商工会有志の皆様方が、夏に
何も無いのは寂しい。せめて、



花火大会でもしよう
じゃないか、と三瓶
町夏まつりが始まり
ました。

当時私も、町商工
会青年部員として準
備や整理など、手伝
いだけをしていまし
たが、昭和六十二年
町商工会青年部長に
なった時、県連の指
導の中で、他団体と
の交流の場という
働きがあり、私も地
元の後継者の各団体
に声掛けをして、交
流会を開催いたしました。

私の方から「夏まつりを
当日だけの手伝いで終わるの
ではなく、計画・立案・自分
達でできる事、無理のない範
囲で協力していく組織作りを
してはどうか」と提案したと
ころ、参加者全員の賛同を得
て、みかめイベント実行委員
会が結成されました。

八幡浜・大洲・宇和島・松



豚のロデオ

三瓶って何処に有るのですか、
周桑郡の方ですか？」シヨッ
クでした。

それ以上に悔しかったのが、
商工会西南ブロック青年部長
会が西宇和郡瀬戸町で開催さ
れた時の事、講師の先生がF
町のWさんでした。

自己紹介が私に廻ってきま
した。

「ウー、みかめ：そんな
町あったかの。アア三瓶
か。何にも無い所よの。」
なんで私の所だけ：何か三瓶
に対して恨みでもあるのだろ
うかとその時思いました。

自分の生まれ育った所を貶
されると悔しいですよ、心
の中で「風呂敷包を持った田
舎のおっさん、あなたの生ま
れたF町より三瓶の方が住み
よくて人情味のあるええとこ
ですよ。あなたの言った言葉、
何時か必ずのしを付けて返し
てあげますよ。」そう叫んでい
ました。

少ない予算ではあるけど、
頭を使って、工夫をすれば目

立った事ができるはず。日本一は難しくとも、日本で一つならできる。

産業に密着したイベントで、尚かつオンリーワンを目指す。心に誓ったのもその時でした。

我が町の産業は、一次産業が主な産業、半農半漁の町だから、早速、ウナギの掴み取りをヒラメに変更しました。柑橘の方は、丁度时期的に悪く何にも無い。

そうだが、三瓶は養豚業も盛んな町だ。豚を使ったイベントを考えてみよう。幼い頃、よく豚に乗って遊んだなあ。競豚、トントレース・・。豚のロデオ、これならおもしろそうだが、早速各方面に問い合わせ、オンリーワンを確認して委員会に提案したところ、へ豚が怒って噛み付いたらへ暴れる豚から落ちて怪我でもしたら、後の保障が大変ですよ



子供たちによるグリーンピック

反対者が多数いる。だが、どうせやるなら思い切って変わったことをしよう。どうしても諦め切れず養豚業者にお願いして、豚の背中に乗せてもらった所、豚は嫌がって逃げまわるけど、けっして噛み付いたりせず、割と安全である事がわかった。

再度の委員会で無理を押し

通して、「第四回海の祭典の日」がやってきました。スタッフの気持ちの中に豚に対する恐怖心の抜け切れないまま、ロデオが始まりました。

参加者が豚の背中から落ちる姿を見て、スタッフが豚が恐くて逃げ腰になるし、会場は爆笑の渦と化しました。心の中では、心配していましたが、一人の怪我人もなく大成功の内に終える事ができました。

あれから十一年、マスコミ各社の協力もあり、豚の町三瓶、ロデオの町三瓶が毎年のように、日本全国に紹介していただき感謝しています。

又、今回はＡＰテレビにより、世界に向かって放送されました。

夏まつりも今年で第十五回を数えましたが、第十三回からは、名称も三瓶を消して、「奥地の海のカーニバル」と改めました。奥地って何処？山奥ですか？実は海なんです。奥地湾、すなわち三瓶湾です。

これからは、おくち、お口、食の方に結び付けて奥地ヒラメ、奥地の生ウニ、奥地のみかん、一次産業、あるいは一・五次産業発展の為にイベントを取り入れて行きたい。

幸い今回からは、漁協も職員総動員で協力していただき始めました。ここにくる迄、色々な苦労がありましたが、Wさん、あなたの言葉が私達三瓶の若者を動かせたのだと感謝しています。

我々委員会のモットーは、肩の力を抜いて遊び心で気楽に参加できる事、政治には関与しない、行政に縛られない。そして何事にも実行です。

舞たうん愛読者のみなさん、来年八月十三日には奥地にきませんか。きてみてや、奥地のかあにばる。

奥地に来れば、我々の開発したロデオ井、ロデオカリ、その他にも色々な昔からの素朴な奥地の味が待っていますよ。

—まちづくりグループ紹介—

“しまなみ交流連携倶楽部”

事務局長

福羅 健二



その日、広島県側の生口島から前瀬戸田町長の和氣成祥氏をお迎えし、氏が実行してこられたまちづくりの実例とその根底にあつた想いをお聴きしました。そのとき指摘されたのがたとえ隣の島でも県境をまたぐと情報が途絶えているということでした。

本年七月二十一日、瀬戸内しまなみ海道に「しまなみ交流連携倶楽部」が発足しました。

昨年十一月、私の店に伯方、大島、大三島の三島五町のまちづくりに関わっている人たちが集まってもらったのが「しまなみ交流連携倶楽部」結成に向けた動きの始まりでした。

ンサートホール（ベルカントホール）、瀬戸田が生んだ日本画家平山郁夫の美術館（当時建設中）、島ごと美術館と称する彫刻の数々など西瀬戸自動車道の開通を見越した数々の施設がありました。

これらの施設を見学したのち人工海浜「サンセットビーチ」において広島県側の尾道、向島、因島、瀬戸田町の青年会議所や、商工会青年部のメンバーと交流会をおこない、その場で「しまなみ交流連携倶楽部」の発足を目指すことを確認しました。

その後、二月の大三島、五月の因島と二回の発足準備会を経て、前述のように七月「しまなみ交流連携倶楽部」は発足しました。

私は「まちづくり」とは、地元に住まう人々の中にある、暗黙の了解として意識の中に存在する、限界点とか壁を打ち壊す作業だと思っています。例えば、伯方に限ったことではないと思いますが、新し

い提案に対して、有効性を検討したり、実行するための方策を検討する前にまず、「そりゃ無理じゃ」とか「どうかう」といった否定的な言葉から始まるとか、正々堂々と正面から論じあうのでなく、陰で「ありや、そのうち潰れらいい」といった陰口をたたいて、自分が動かないことの正当性を論じる、といった風潮を変えることが「まちづくり」の第一歩ではないかと思うのです。

だから切り口は、伝統芸能の継承でもかまわないし、生活基盤としての商業活性を語ることもかまわない、何でもいから行動を起こし、自分と地域の関わりを認識することが大事なのです。

私の「まちづくり」活動は、商工会青年部の部長をしたり、商業活性のための共同スタンプの会を作ったり、ということから始まりましたが、平成五年頃から平成十一年の西瀬戸自動車道開通によって、島

が想像以上に大きく変化するのではないかと考えが強く、地域を見据えた「まちづくり」が不可欠と考えるようになりました。

そこで、まず地域の情報交換の仕掛けを作ろうと友人たちに相談し、チラシの延長線上と考え、共同で資金を出しあって、平成六年八月に島の新聞として「ひらけゴマ」を発刊し、その発行母体としての「井戸端カンパニー」を結成しました。以下はその発足宣言

井戸端カンパニー発足宣言

私たちが住んでいるこの島嶼部は、この三十年で大きく変わりました。

独立した島（点）が橋（線）でつながり、西瀬戸自動車道が全面開通した際には尾道―今治をつなげる地域（面）となります。この点から線、線から面へのステージの変化により、我々の生活や意識も否

応なく変わっていくと思われるます。

私たちは、この時代の変化に対応できる新しいネットワークづくりが急務と考え、「井戸端カンパニー」を結成。情報交換ツールとしての月刊紙「ひらけゴマ」を発行いたします。 平成六年八月

「ひらけゴマ！」というタイトルは、地域を変えるのはまず一人一人の心の扉を開くことではないかと考え、「アリババと四十人の盗賊」の扉を開ける呪文から名付けました。また「井戸端カンパニー」の井戸端は情報交換は井戸端会議のような柔らかな仕掛けが望ましいとの意味、カンパニーはいずれ地域が変わる中で仕事も変化していくだろうから、時代にあった会社をみんなで興そうとの想いを込めて「井戸端カンパニー」と名付けました。

「一年持たないだろう」と言われながらも「ひらけゴ



因島での発足準備会

が変わるなかでメンバーの夢を実現するために作った仕組みであり、いわば個人的な理由が強い組織です。

もっと大きく、みんなの夢を重ね合わせれる仕組みが必要になってきました。それを果たせるのが冒頭に記しました「しまなみ交流連携倶楽部」なのです。

私は、世の中は「無いもの探し」のまちづくりから「有るもの探し」の地域づくりへと移行しているように感じています。言い換えればよその施設や人の知恵を、重ね合わせ生かしあう連携と交流の時代が来たのではないかと思います。

そのような時代に、単位行政の枠はもとより県の枠をも越えて、愛媛と広島の人々が自由に地域の将来について話し合える「しまなみ交流連携倶楽部」が、民間の発意によって出来上がりました。多くの人の参加をお待ちしております。

「井戸端カンパニー」は島



井村 雄三郎

国でも上位に位置する典型的な高齢化と少子化に直面している離島の村です。しかし、その分、村は至って平和であり、事件のようなものは殆どありませんが、駐在さんも時折やってくる島外からの船舶やヨットには、特に目を光らせているようです。

まあこれも、あのオウム事件の影響のようですが、静かで平和な村であることには間違いありません。

●島が変わる、不安と期待

しかし、こんな村にも一年後にはミニバトがやって来る予定です。

それは、架橋の完成により隣の広島県豊町（大崎下島）、豊浜町（豊島）と陸続きになるからです。人口で約七倍（約七〇〇〇人）、世帯数でも約七倍（約三二〇〇世帯）になり、更に、いままでは海によって隔絶されていた地域同士



が橋により二十四時間往来が可能になるのです。

以前までは、橋で他の地域とつながることにより、ある人は「それぞれの地域が交流によって活性化する」といい、ある人は「不用心になり、戸締まりに注意をしなくちゃいけない」と、不安を訴えたりしていました。橋の完成を一年後に控えた今、住民の声は、より具体的になってきて

います。

それは、橋の完成により食料品や生活用品などの購入先の選択肢が増えることや、地元からだけでなく、他の島から出ている今治、広島方面への豊富な船便が利用できることとであり、またその一方で、橋がつながることにより航路の再編による便数の縮小や、地理的に関前村が半島の先端に位置することによる通行車両の増大とゴミ問題を危惧する声などがあります。

●一つの仕掛け

現在、私達の村においては、これら広島県の二町と広域事務組合を作り、「ゴミ処理（産業廃棄物を除く）」と「し尿処理」を行っているわけですが、去る、七月五日にこれら二町の関係者にも呼び掛け、関前村主催による環境フォーラムが開催されました。

内容は、広島大学の地井先生にご講演していただいた後、先生や地元の各婦人団体の代

私の住む関前村は、三つの島からなる人口一〇〇〇人余りの小さな村です。今治から高速艇で三十分、フェリーで一時間（海上十六キロメートル）の広島県との県境に位置しており、主な産業は「柑橘栽培」と「鯛の一本釣り」や「サワラの流せ網漁」です。

また、高齢化率が四三パーセントと県内で一番高く、全

表、更に研究会議のメンバーもパネラーとして加わっての意見発表や参加住民とのフォーラムなどです。

私達の村において、このようなフォーラムを行う事は、初めてであったため、今一つ十分な内容とはいきませんでした。が、地元からパネラーとして参加していた各婦人団体の人達が結構鋭い意見を言っ



いたのには、私自身も住民の



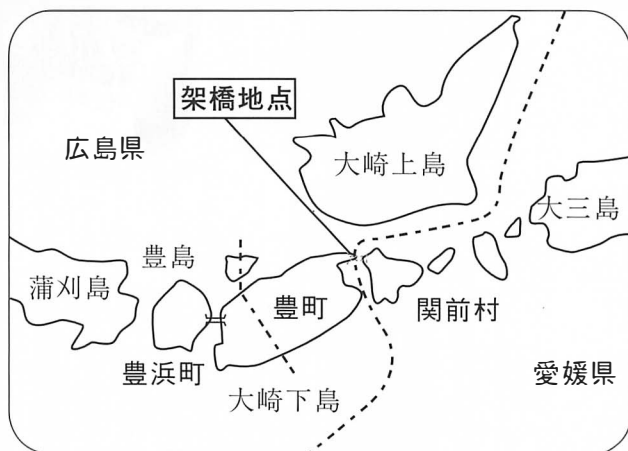
一人として頼もしくおもえました。

また、パネラーで急遽参加して頂いた研究会議の若松さんや守谷さん、岡田さんには、要所、要所で貴重なご意見を織り交ぜていただきながら無事終えることが出来、大変感謝しております。ありがとうございました。

●戦闘能力の構築

架橋完成まで後一年と言う残された時間の中で、どこまで地域として戦闘能力を高めることが出来るかについては、甚だ議論の余地も無いところではあります。が、この小さな地域の中にもそれぞれの分野で架橋後の関前村を睨んで、それに対応すべく準備をしている人達もいるのですから、後は、行政サイドがいかに地域住民の声を広く集め、それらの声や力を結集すべく仕掛けを作っていくかにかかってくるように思います。

そして、今回の環境フォーラムで学んだことも生かしながら、時には、学識経験者や村外の人達のお知恵もお借りしながら、行政と住民とが公開の場で話し合える場づくりを増やして行く事が、少しでも地域の戦闘能力を高めることにつながっていくように思



います。せめて、一年後の架橋完成までには不十分であっても、十年後に広島本土と陸続きになるまでには間に合うかも知れません。私自身もそれまでに少しでもお役に立てるよう、日夜精進していく所存です。



—研究員レポート—

“はじめの一步”

研究員 伊手 博志

まちセンってなに

まちセンでの生活が始まってから、早いもので半年が経ちました。

今回の異動が決まった時、ある人に、「具体的に何をすればいいのか」聞いたことがあります。「何をしたらいいかは言わない方がいい。とにかく

真っ白な状態で行っておいで。」というのが、その時の返事でした。

はつきり言って少し不安でした。地域づくりにについての具体的な知識も、実践等の経験もほとんどなく、しいてあげれば、お祭りの事がちょっと好きだ、というぐらいのことでしたから。

よくまちづくりにはマニュアルがない、という言葉を耳にします。先進地の事例は、もちろん参考になりますが、そのまま真似をすればいいというものでもないようです。地域を見つめ、自分達で考えながら、独自のものを創っていく、それが大切な事のように思えます。

まちセンでも人に言われた事をするのではなく、まず経験して、そこから何かを感じとりなさい、「真っ白」にはそういう戒めも含まれていたように思います。

牛鬼だーいすぎ

ところで、皆さんは牛鬼というものをご存じでしょうか。

愛媛県の南予地



加藤清正が敵を威圧するためにつったとか、その由来には諸説あるようです。

さて、私は牛鬼に関わって三年程になります。津島牛鬼会の会長との関係やちよっぱり目立ちたがりの性格も災いして、今ではすっかり両足が浸ってしまっています。

この津島牛鬼会には、祭りごと大好き人間が集まっています。皆目立ちたがり屋で、何故か牛鬼にこだわりを持っていきます。会員は三十数名、平均年齢は二十六、七歳といったところでしょうか。

方に昔から伝わる「練りもの」で、祭りには欠かせないものです。大きさは全長五〜六メートルにも達し、胴はしゅろの毛、または赤や赤紫の布で覆われ、顔は鬼面、祭りでは神輿のつゆ祓いの役目を果たしています。枕草子にも牛鬼という言葉が出てくるとか、

ます。

ただいま修行中

さて、私は今、「えひめ地域づくり研究会」の事務局を担当させてもらっています。事務局という立場でありながら、実は皆さんに勉強させてもらっている。そんな気がとてもしています。それぞれの人が、地域づくりの事はもちろん、いろんな情報、豊富な知識、幅広い見識、すごいほどの人脈を持っています。さらには実践家でもあります。

研究会議の皆さんに少しでも近づきたい、その為には、いろんな人、それも仕掛人と言われる人に会い、直に話を聞くことが研修の第一歩だと思います。

私の最初の県外研修の機会は、広島県総領町で開催された、逆手塾の第十五回記念大会でした。改めて説明するまでもなく、この逆手塾は、まちづくりの世界ではよく知られており、今年も、全国から大勢のまちづくり人が集まり

ました。リレー講演に始まり、いのち饗宴コンサート、人源の縁日、遊び人登場、そしてカゲキなまとめと、遊び半分でありながら奥が深いという何とも不思議な世界です。そして、参加者それぞれが個性的で、情熱的です。

そういうえば、参加者心得の中に、〈人源交流〉〈人儲け〉が勝負です、という文句がありました。まちづくりの基本は、やはり人づくりです。このことを新ためて肌で感じさせられました。また、ネットワークの大切さも教えられたような気がします。



逆手塾での興奮も冷めやらぬままに、次は鳥取・岡山へ。

米子市では、「彦名地区環境をよくする会」の向井さんにお会いしました。生活排水で汚れていく中海への憂いから、環境問題に関わるようになり、まず自分の出来ることから実践していったそうです。割り箸のリサイクル運動は会社の理解も得られ、大きな広がりを見せてきています。また、向井さんは、住民・行政・企業のパートナーシップによって具体的な環境改善に取り組んでいる、日本グラウンドワーク協会の専門委員としても活躍されています。

同じ鳥取県の溝口町では、地元に残っていた鬼伝説を活用し、鬼にこだわったまちづくりが行われていました。

また、岡山県旭町では、過疎化、高齢化が進む中で、桜という地域資源に着目することからスタートし、桜から花さかじいさんを連想し、やがて民話村の整備へと繋がって

います。

これらの町では、施設等、ハード面の整備は概ね終わっており、ソフト面での盛り上がりが今後の課題となっているようです。

おわりに

ふるさととは、そこから離れてみて初めて強く意識できるものかも知れない、時々、そんな風に考えることがあります。離れてみて初めて思うことや感じることも、また、いやなところ、いいところなど、いろいろと自分勝手に考えたりしています。

まちづくりを考えるとき、少なくとも自分の住んでいるところへの愛着、また情熱が必要だと思います。そしてまだまだ勉強不足の私としては、少なくとも傍観者にだけはならないよう、充分気をつけていきたいと思っています。

“MY TOWN” “うおっちゃんく”

歩キ目デス & 足ラテス



岡崎 直司

ナーでは、“町の見方”について、見る楽しさをお届けしようと思います。ご案内はタウンウォッチャー岡崎直司。ならば、お兄さんではなくておっちゃんではないか、という向きには、異論アリ。私はおっちゃんではなく、ウォッチャー。

持っていくものは？

さて、「見る」ということについて、まず最初にその準備物からお話ししましょう。何はなくとも「目玉」これだけは絶対忘れないで下さい。出来れば、単に目玉である、というより、心とつながってる目玉が最良品です。このことについては後で述べます。

次に“足”、出来るだけ丈夫なヤツがいいと思います。おアシの方はあんまりいりません。いろんなモノを見て回るわけですから、

歩くことが前提になります。フットワークの軽

い人、大歓迎です。

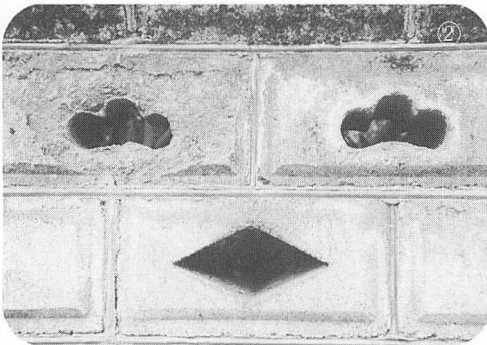
以上、目玉と足さえ揃えば、まあ、あとは何とかなります。そんなワケですから、この教室、講座名を「歩キ目デス & 足ラテス」に致します。

心のウォーミングアップ

では、準備物が揃った所で「いざ、町へ！」となりますが、まあそう慌てないアワテナイ。

見方のイロハ、さわりの部分からま

ずご伝授
申し上げよう。ナ
ニゴト
も、行動
の前に心
構えは大
切です。
人の目
玉ってヤ
ツは不思議



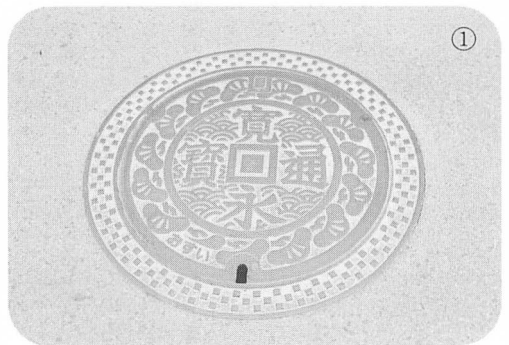
東予市内にて（山中英市氏撮影）

が付いてるよう
で、実はそれが
さにあらず。近
視、遠視、乱視
はともかくとし
て、要はその目
玉の使い方。

「目は口ほど
に物を言い」と
いう諺があつた
りもするけれど、
「目に物見せてや

議なもの
で、皆それ
ぞれ同じ目

ろう」などと、肩に力の入
っている御仁なら、尚のこと
気を付けなければいけないこと



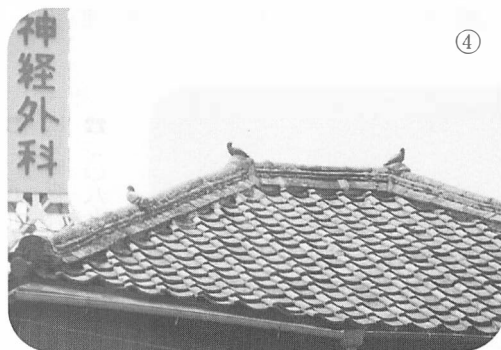
香川県観音寺市（山中英市氏撮影）



川内町にて

がある。その厄介なシロモノとはスナワチ「目のうろこ」のこと。人間の目玉、もしくはまなこには、それはそれは沢山のうろこが付いているんだそう。従って、物理的には見えていないんだけど、見ているようで、意外と見ていない、という困ったことが、実際にはよく起こる。これ全て「うろこ」の仕業。

でも、原因さえ分かっていたらばことはカンタン。そのうろこをはがしてやれ



八幡浜市にて

ば良い。一枚、二枚、丹念に取り除こう。そう



大洲市柚木にて
間は面白い対象だが、これ又際限が無いのでカット。

いよいよ路上へ

そいじゃ、行って来ます。最初に、肩ならしならぬ目ならしから。ウォッチングは歩くことから始まりますから、まずは目を路上から這わせていくことになります。物事の始まりとしては、これがホンマの常道というヤツです。

①の写真はマンホールのフタ。近年、日本全国どこかしこ、まちづくりブームとやらで、こうしたデザインのもので、こうしたデザインのもので、こうしてきました。見た目の

が増えてきました。見た目の善し悪し、ピンキリも色々あるようですが、各地の特徴が出ていて愉快です。路面を観

察しているとタマに小銭を拾うコトもあり得ますが、今回見つけたのはナント寛永通宝。

次にフェイス・ハンティングという見方を遊びます。

②は単なるブロック・パターンですが、こうやって顔に見立てます。③もしかり。前を通る小学生の女の子に何か呼びかけているのかも知れません。顔は少し化粧が濃いうです。 ※注

④は屋根瓦ですが、よく見ると、ちよつとヘン。鳥の形をした飾り瓦が載っていますが、おやおや、左の一羽はホンモノでした。

⑤はホンマモンの鬼瓦、鬼は鬼でも般若の鬼面です。実はこうした手づくりの瓦が、今ドンドン減っていて、屋根の葺き替え時に、量産タイプの普通の瓦に取って替わられています。

てな所で、まず第一回目はサラッと流しておきます。次回以降の為に、これだけ覚え

歩いて速度でちよつと見る、立ち止まってじーっと見る、慣れて来たら心の目で観る。ミルミル上達観る極意！

(注)これは戦時迷彩と言って太平洋戦争時、空襲よけの為日本中の白壁という白壁が黒く塗られたことの名残です。これでは勝てっこアリマセン。

オープンが待ち遠しい
鬼北の新スポット
特産品販売施設
『森の三角ぼうし』
広見町

現在建築中の特産品販売施設は、国道三三〇号線と三八一号線の交差点に面しており、中央に赤い三角屋根を配したおしゃれな建物です。町内の農林家の生産意欲の向上を目指すと共に、消費者との交流拠点として町が建築して、森林組合が経営し、入会金、手数料を支払えば、誰でも出荷することができます。

施設内には、農産物・林産物をはじめ、木工品、竹細工、陶器、石の彫刻、ガラス製品、かざり細工、草木染め、山野草、町内の特産品、趣向をこらしたアクセサリなどが豊富に並び、きつと満足するものが見つかるはずです。



また、軽食喫茶では、農産物や林産物を豊富に使ったメニューが揃っており、ヘルシーな食事が味わえます。

町内外の多くの方に利用していただける施設、そして親しまれる施設として、年内オープンを目指しています。

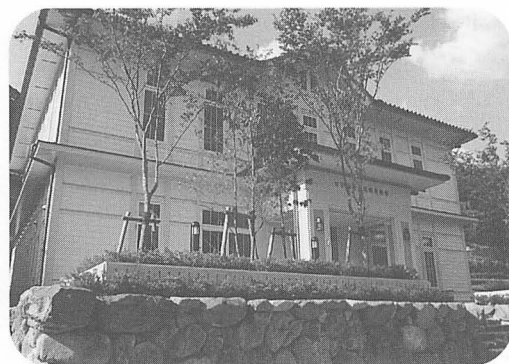
〈営業時間〉
午前九時～午後九時（予定）

〈問い合わせ先〉
広見町役場産業課
☎（〇八九五）四五一一一一
広見町森林組合
☎（〇八九五）四五〇八一四

『日吉村
歴史民俗資料館』
11月オープン
日吉村

日吉村では、明星ヶ丘整備事業の一環として日吉村歴史民俗資料館を新築しました。この事業は、明星ヶ丘（日吉村下鍵山にあり、与謝野晶子が命名したといわれる）を文化の丘として整備し、本村の文化の拠点とすることを目的としています。

この施設の主な内容として、一階は、三世代交流や体験学習会のできる創作室、各種展示会が開催できる特別展示室を設けています。また、常設展示として、村の特産品、工芸品、村内に伝わる伝承芸能を紹介します。二階は、主に本村で収集された様々な民具を展示し、用途ごとに分けて解りや



すく紹介しています。他にも、伝統技術や特殊な技術をもった村民の方を映像で紹介する「日吉村二十五人の伝聖人」のコーナーなど大人から子供まで楽しめるようになっています。

なお、オープンは十一月の予定です。

〈開館時間〉
午前九時～午後五時（予定）

〈問い合わせ先〉
日吉村教育委員会
☎（〇八九五）四四一三二二

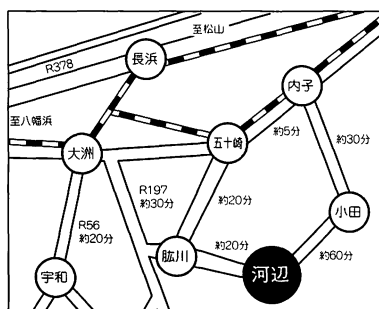


お知らせその1

『ふるさとづくり文化講演会』開催

— 今年のテーマは、住民と行政の共創による地域づくり —

- 講 師 土井 利樹 広島大学学校教育学部助教授
- 演 題 「ふるさとに生きる誇りと喜びを育てる」
- 日 時 平成9年12月5日(金) 13:30～
- 会 場 河辺村基幹集落センター(河辺村役場隣)1階大会議室



- 参加費 無 料
- 主 催 河辺村、(財)愛媛県まちづくり総合センター
- 問合せ 河辺村教育委員会 社会教育課 担当：樽井
- ・申込先 ☎ 0893 (39) 2111 FAX 0893 (39) 2115

お知らせその2

『地域づくり研究サロン』開催

— まちづくり活動で悩んでいる人 集合! —

県内各地で数多くのまちづくりグループが活動をされていますが、たぶんのグループも、何らかの課題や悩みを抱えられていることと思います。それを、サロンの場でぶつけ、討論していく過程で、解決の糸口を見だし、次の段階へのステップとしていただければ幸いです。

- テーマ 「まちづくり活動 第2ステージ」
—活動のステップアップのために—
- 日 時 平成9年11月21日(金) 13:30～
- 会 場 まちづくり総合センター会議室(松山市三番町8-234県生活保健ビル)
- コーディネーター 讃岐 幸治 愛媛大学教育学部教授
アドバイザー 小山田 憲正 地域づくりグループ「源流」会長
- 参加対象 各まちづくりグループで、リーダー的役割の人
- 申込先 (財)愛媛県まちづくり総合センター 担当：稲田
☎ 089 (932) 7750 FAX 089 (932) 7760

※先着順で、定員25名になり次第、締め切らせていただきますので、申込はお早めに

ちょっと早めのお知らせ

「えひめ地域づくり研究会議」'97年度フォーラム開催

テーマ『ローカルに生きる』

— 四国遍路文化に学ぶ —

- と き 平成10年1月24日(土)
■ところ 仙遊寺(越智郡玉川町 四国霊場58番札所)
■プログラム 12:30～ 受付
13:00～ 開 会
13:30～ 基調対談

堀内 統義(日本現代詩人会会員)

小西 昭夫(俳人)

15:15～ 分科会

①交流が育てる地域

提言者：岡田 文淑(内子町)

②遍路に見る癒しの地域づくり

提言者：小山田 憲正(仙遊寺住職)

③お宝探しで地域再発見

提言者：岡崎 直司(地域ウォッチャー)

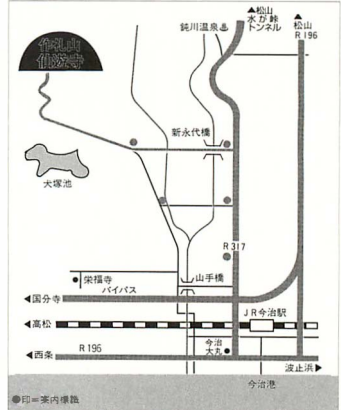
18:00～ 交流会

20:00 閉 会

- 主 催 えひめ地域づくり研究会議・(財)愛媛県まちづくり総合センター
■参加費 フォーラム 2,000円 交流会 5,000円
■特別企画 体験「歩き遍路」 フォーラム前日1月23日(金)予定
■その他 詳細についての問い合わせ、申し込みなどは

(財)愛媛県まちづくり総合センター内「えひめ地域づくり研究会議」事務局まで

【仙遊寺へのご案内】



近頃めっきり秋らしくなって、人恋しい季節になりました。一人身の私にとっては・・・さて、話は変わって今号からスタートした新企画『MY TOWN うおっちんぐ』は、いつも何げなく見ているものが実は歴史的遺産!だったり、見方によれば結構面白い!というごく普通な感じで始まりました。さて、これからどういう展開になるか、お楽しみに。

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

『舞たうん』編集係まで

〒790 松山市三番町八丁目

一三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

TEL089 (932) 7750

FAX089 (932) 7760

発行/平成九年十月十五日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

(財)愛媛県市町村振興協会